

かがやき

令和4年 11月11日(金)
多摩市立連光寺小学校
特別支援教室 かがやき学級
学級通信 NO. 10

ゆっくり、ゆっくり季節は進む

11月に入りました。木々の色取りがグラデーションを生み、季節の移り変わりをさらに感じさせてくれますね。とは言え、こうした「季節」という変化にアンテナを張るのは「大人」として歳を重ねていくからなのかもしれません。以前、「子供の体感時間は大人の6倍以上(「ジャンネの法則」)」を引き合いにしてお伝えしたこともあります。日々を全力で生きている子供たちには一つの季節の移り変わりも数か月間続く遠い未来のことなのかもしれませんね。学校では展覧会に向け、着々と準備が進んでいます。(5年生は連合音楽会も控えています。)イベントへの準備も長い長い助走期間に感じている子もいるかもしれません。この長く、ゆっくり流れていく時間を子供の時間感覚として想像しつつ、子供たちが元気に、楽しめるように応援していきたいと思っています。

読書の秋 「ともだちやシリーズ・ごめんねともだち」読み取るきつねとおおかみの関係性

「ともだちや」シリーズの「ごめんねともだち」を、必要な課題に応じて読み聞かせながら、みんなで場面を考えることがあります。お話は仲よしのキツネとオオカミが家で楽しくパーティーゲームをしていると、独り勝ちを続けるキツネが「また勝ちちゃったあ！」とオオカミをあおります。(本人は意図せず。)すると、その態度にがまんできなくなったオオカミがキツネに「インチキだ」と因縁をつけ、一方的にキツネを暴力的に自分の家から追い出してしまいます。この対応に怒り心頭で家を後にするキツネ。「くやしき」にまかせてつい乱暴な行動をとってしまったオオカミ。自分の言い過ぎだったとすぐに反省しますが、お互いにケンカ別れとなってしまいます。なかなか素直に自分の気持ちを相手に伝えられず仲たがいの日々が続いていきます。もう元にもどれないのか…と途方に暮れる「二人」。するとふとしたことがきっかけで「ごめんさい」と言うタイミングが二人に訪れ、無事に仲直りすることができたという話です。場面を振り返りながら、どうして二人がけんかになったのか。きっかけは何か。二人はどんな行動をとったか。もし、自分ならどうするか。自分から謝ることができるか。等々みんなで振り返っていきます。子供たちからは「そもそも、キツネの言い方がよくない」「オオカミのいきなりの暴力はよくない」「すぐにあやまるなんてできない」「あやまるのはきまずいんだよね」いろんな意見が出てきます。自分のことだといついつい冷静になれないことも第三者として状況を丁寧に外側から見えていくといろいろ思うところも整理できる場面が出てきます。子供たちは生活の中で物事の「因果関係」についてはその場ではうまく説明できなかつたり、自分の気持ちも言葉にしづらかつたりすることはまだまだたくさんあるし、まさにそのことを日々学んでいるところです。そんな子供たちに絵本の世界を通して、相手との関係性を読み取ったり、気持ちの動きを読み取ったりしながら自分の生活にもフィードバックできる経験につなげていければと思う秋の読み聞かせの時間です。

お知らせ

・後期面談が始まります！！

12月中旬から下旬に、かがやき個人面談をする予定です。かがやき担任との2者面談になります。11月下旬に希望調査をとらせていただきますのでよろしくお願いいたします。



ごめんねともだち



ジブリ作品「耳をすませば」から聞こえてくるもの

～自分探しの季節～

1995年にアニメが公開されてから27年になります。多摩市を舞台にしたジブリアニメとして多くの人に親しまれている作品ですね。高学年を中心に「耳をすませば」での主人公の成長を教材に話を共有することがあります。成長していく自分を知る。自分が「背伸び」をしようとする感覚ってどんなものだろう。そんなことを一緒に考え、作品の絵本を読み返しながらか。以下のように思いました。

「ストーリー」

主人公は中学3年生の月島雫という読書好きの女の子。日々図書館や図書室で本を借りる毎日。ある日、自分が借りる本の図書カード(時代を感じますね。)に常に同じ名前があることを見つけます。「天沢聖司」。どんな人なんだろう。雫の想いが膨らんでいきます。友達との学校生活。部活。片思い。告白。終わりなき日常を背景に物語は進みます。そして天沢聖司が自分が偶然見つけたアンティーク店の孫であること。将来バイオリンのマイスターになる夢をもっていることを知ります。最初は反目し合う二人ですが、徐々に互いの存在を認め合う関係へと発展。しかし、まだまだ未熟な雫のアイデンティティーはこの「成長」に大きく揺さぶられます。リスペクトする相手(聖司君)はもう夢が決まっています。イタリアに留学するとまで言っている。方や自分は聖司君と同じ高校に行けたらいいなくらいの気持ち(目標?)しかもっていない。この決定的な「差」を主人公が感じることから物語は自分自身を見つめ成長する段階へと発展してきます。「あいつは自分を試すって言った。だから私も自分を試してみる!」親友に自分の気持ちを打ち明け、自分の物語を書くことにチャレンジ始める雫。受験も迫る中学3年の二学期。親の反対も押し切り、雫はひたすらに物語を書き進めていきます。この物語で秀逸なのは、こうした突っ走る主人公を見守る大人の存在の描かれ方でもあります。「雫がそしたらならやっごらん。でもね、自分で決めたことは、どんな結果になっても誰のせいにもできないからね。」雫の父も家族会議で厳しく、優しく決意を伝えます。聖司が帰国するまでの3週間。雫は自分を追い込んで物語を完成させます。そしてアンティーク店の店主で雫の理解者でもある聖司のおじいさんに完成した物語を届けます。「ありがとう。とてもよかった。」好意的な評価を受けた雫でしたが、自分でもこの小説がどのレベルの出来かがわかっていました。ただ、どんどん自分の先に行ってしまう聖司に追いつきたい一心で「背伸び」をした雫はおじいさんの前で泣き崩れてしまいます。そんな雫に「原石を磨いてください」とおじいさんは語り掛けます。そしてこの経験から自分の今の精一杯の力に気が付いたとき、自分に何が必要なのかが見えてくるのでした。物語後半、聖司と高台から朝日の上る多摩川を見つめながら、雫は「私、背伸びしてよかった。自分のこと、前より少しわかったから。私もっと勉強する。だから高校へもいこうって決めたの。」と、自分の心情を吐露します。そんな雫に聖司は将来結婚しようとしてプロポーズするのです。自分は何者なのか。何ができて、何ができないのか。この先どうなっていくのか。まだまだわからないことはこの先も出てくる。ただ、意識していなかった不安が目の前に現れたとき、人は葛藤しながら成長の一步を踏み出す。「耳をすませば」から聞こえてくるのはそんな未来に踏み出す一步一步への足音のように感じました。

かがやき
4コマ劇場

